

## 十三才戦時下の覚え

糸島郡二丈町

片岡 嘉子

私が国民小学校6年生の夏の日、熊本市内の空襲が一番多い頃、私達の小学校と言えば、運動場にはからいも（さつまいも）を作り、塀にはカボチャを作り、先生に習ったものは、「ナギナタ」（青竹）で突き！！突き！！の練習でした。学校の講堂には、一般の家庭からの「タタミ」を講堂の天井迄とどくぐらいの「タタミの山」でした。（現在でもこれは不思議です）

あの日、突然警戒警報なしにすぐに敵飛B29が編隊を並べ頭上に飛んで来ました。私はどうして学校から帰ったかおぼえていません。私の家の岡の上に赤いレンガ作りの裁判所が聳えています。その建物を狙ったものと思われませんが、その流れタマが、私の住んでいる岡の下の町を全部焼きつくしてしまいました。私達は、すぐ近くの横穴式防空壕（奥行数百m）でおそるおそる首を出して見ていましたら、油のようなものが雨のように降り、少しして黒い固りが空中で炸裂し火の海と化したのです。

それが焼夷弾だったのです。

私達はその夜より防空壕での生活を始めました。焼後を呆然と見る人々で一杯でした。その時の両親の姿が哀れで、子供心に涙を流したものでした。

昼食の御飯を「クド」にかけ、そのまま逃げていましたが、焼後からハガマの蓋が焼け落ち、「カボチャ」と「ウドン」を入れた御飯が出来上がっていました。それを母がオニギリをし、もったいないと言って食べたものでした。

学校に行くと見ると、講堂のタタミがそのまま焼け灰となり、まだ火の固りで近くに寄ることはできませんでした。

学校の塀のカボチャも熟したまま焼け、食べもののないそのころは、1人がそれを手にし持ち去り、1人が、2人と、後で喧嘩してまで取り合うほど皆飢えていたものです。

その後、何もかも焼け出され、亡くなった父が焼けただれた焼夷弾（道ばたにうまっている）を抜き出し、直径が10cm長さ40cm鉄の厚みが6mmものを一枚の鉄板にして、フライパン風に作り、メリケン粉と言っても真黒な粉をこね、醤油（塩汁のようなもの）をかけ、飢えをしのいだものでした。

じめじめした防空壕での生活のうちに、あの終戦、皆涙をボロボロ流して、ラジオの前に釘づけでした。今思えば家族が一致団結し、子供心に親が涙していれば子供も小さい涙を流しました。

終戦と共に、私達も生活する場所を確保するために小さな手で焼跡より焼けた瓦を拾い、焼残った木々を拾ってホッタテ小屋を建て、両親は兄が軍隊より帰って来た時の目じるしにと、名前をかけ待っていました。

食べものも何もない時でも、兄だけには陰膳と言って一番食を母が作っていたものです。3

畳ほどのホッタテ小屋でも、真黒な防空壕の中の生活より明るい日々でした。

そうこうしております間に、私達の学校もやっと明るさを取り戻し、昔の女学校入学（現在の高校）の試験の日が来ました。学校もどこも焼けおち、二部制の授業の中で、無事試験合格し、女学校にあこがれの入学をいたしました。敗戦の直後の学校、毎日が農作業、ちょうど田植えの時期から始まり、稲刈り、いづれも手作業にて、手は荒れてひび割れ、ガサガサの日々でした。ちょうどその頃学校にて、「ララ物資」といって、着る物の配給があり、皆心ワクワクである時ほどうれしい思い出はありません。私には顔と身体に不釣り合いなピンクのブラウスが当たり、前身頃にピントックが沢山してある、それはみごとなブラウスで、皆よりうらやましくされたものです。

やっと女学校も4年生にて卒業という折りに六三三制たるものが決まり、私はまた同じ学校に後3年間勉強しなくては、今から先高等学校卒業にはならない。結局今迄の3年間は併設中学校卒となり、長い学校生活になってしまいましたが一生懸命勉強しました。でも結果から考えるとありがたいものと思ってます。エンピツも紙もなく、消しゴムもなく、テストの時はエンピツを消せば紙が破れるし、消しゴムも自動車のタイヤを小さく切って消していた時代です。

私の制服は母の黒の着物にて作っていただき、その思い出もついこの間のように感じます。その時代を思えば現在は贅沢なものです。でも、それに私達も自然と染り、年老いてゆくものですね。